

2024年度総括・2025年度方針

根っこわーくす代表：大島 一

《 2024年度 総括 》

根っこわーくすを立ち上げて8年。

「自己肯定感(根っこ)が育つ居場所」づくりを通して、「自分を信じるチカラ」「ひとに助けを求めるチカラ」(幹)が育つ支援をすること、誰もが当事者となって、多様な個性を活かし合える社会(森)の実現を目指しています。

8年間の活動を通して、私たちは「ものの見方」をアップデートしてきました。

・大人の役割は・

自己肯定感を「育てる」⇒(自ら育つチカラを信じ)自己肯定感の「育ちを支援する」

大人が「良かれ」と思って行う「おせっかい」が、子どもの主体性と当事者性を奪っては いないか！？

「自己肯定感を育てる」ことは、法人の目的なのか？それを通して何を実現したいのか？

・「教育的アプローチ」⇒「教育福祉」的アプローチ

「教育」を広辞苑で調べてみると「教え育てること」「他者が意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動」とあります。「望む姿に変えてやろう」というのは、「子どもを主体にして育ちを支援する」という私たちのスタンスとのズレを感じます。

「福祉」は、「幸福」という意味で、「福」も「祉」も「幸せ」を表す漢字です。

法人設立以来、教育的なアプローチとして「自分で考えてやってみる」ことを大切にしてきました。その結果、子どもたちの「自分で考えて行動する」(自律)姿が見られるようになりました。一方で、「したいことが無い、ひま～」と嘆いたり、「～してもいい？」といちいち尋ねてくる姿も見受けられます。

幼少期から「～しなさい」や「～やめなさい」など、大人から指示・命令・禁止されることが多く、自己決定する機会が少ないことで、誰もが本来持っている主体性を失ってしまっているのでしょうか。「言われたことしかしない」「言われないとしない」「自分の気持ちが分からない」「自分のやりたいことが分からない」子どもが増えています。

子どもが本来持っている自ら育つチカラを「信じて、任せて、待って、支援する」関わりが必要です。

日本財団「子ども第三の居場所事業」の運営を始めたことをキッカケに、これまでの「教育的なアプローチ」に共感して参加する子どもたちだけではなく、交野市との連携のもと「市内の広範囲の子」「困難を抱えた子」「支援が必要な子」など多様な子どもたちの受け入れが始まりました。

「自分で考えて！」と突き放すのではなく、自分で考えてやってみることのできる環境が大切です。失敗やトラブルなどの「不都合から学ぶ」ことができる場が必要です。たとえ上手くいかなくても、「自分がやってみたいことをやってみる」経験、他者と対立しても勝ち負けではなく互いに納得できる解を出し合う経験は、大人のあたたかい見守りがあることで出来ることです。その中でこそ、子どもたちの「自分が自分で在って大丈夫」だという自己肯定感は育っていきます。

「教育福祉」という新たなキーワードを持つことで、まずは何より「安心・安全」をベースにして、誰もがチャレンジしてみようと思える環境づくりに取り組みます。誰もが自分と社会の幸せをつくる当事者として、「自分で考えて、行動を選択する」経験ができる居場所づくりを進めます。

2024年度 報告

これまでは、4つの事業「子どもの居場所」「もうひとつの学校」「子育て子育て支援」「おとなの学び」で活動をしてきました。9年目のスタートにあたり、より実態に合ったものとして2事業の名称を変更します。

「もうひとつの学校」⇒「フリースクール」

フリースクール(いどこスクール)をスタートして5年。当初は「既存の学校とは異なる学校」として始めましたが、何か実態が分からないという声も聞こえてきます。「フリースクール」と名乗ることで分かりやすくします。

「子育て子育て支援」⇒「子育て支援」

「子育て」と名乗ることで、「子どもは自ら育つ」という理念を伝えようとしたのですが、これも分かりづらいものでした。実態としては「子育てするお母さんが元気になる」事業なので、よりシンプルに「子育て支援」事業とします。

① 「マンスリーサポーター制度」を開設しました。

単発寄付も増えてきましたが、法人収入の中の寄付金が占める割合はまだまだ低いです。

私たちが応援し、共に歩んでくれる人たちがいるにもかかわらず、積極的な働きかけが出来ていません。

② 月一回(第一金曜日)の「経営会議」と「社内研修」をスタートしました。

経営会議では、理事メンバーの「思い」と「財政面の実態」をすり合わせ、その「重なり」を意識した法人の方向性(経営)を話し合ってきました。

社内研修では業務のやり方(do)の話よりも、運営メンバーが今感じていること(be)を大切にされた対話を行ってきました。

③ 交野市との連携

交野市子育て支援課主催の「子育て支援者交流会」(年2回)の企画・運営や「気になる子・家庭」の情報共有、子どもの居場所づくり連絡会を通して、信頼関係をベースにした連携が進んできました。

子育て支援課を通じて、市民からの食材の寄付が届きました。

④ 他団体・地域との連携

・交野市内の企業や団体、市民からの寄付が増えました。

・キサイチゲートに出店するなど、地域との連携を進めました。

・交野市内の福祉団体との連携が生まれ、「教育福祉」の概念の具体化に向けた取り組みを始めました。

《 2025年度 方針 》

法人全体として

「それって、何のため？」を見失うことなく進みます

引き続き「自己肯定感(根っこ)が育つ居場所づくり」「つながりのチカラで創り続ける居場所づくり」を進めます。改めて「自己肯定感って？」「居場所って？」「大人の役割って？」「法人は何を目指すの？」を問い続け、実践していきます。

一人ひとりが、そして私たち根っこわーくすが、「自分(たち)を信じ」「他者に助けを求め」ることが出来るように…自分(たち)の意思をよく観ること、他者と対話することを大切にしていきます。

その活動を支えるための財政面での安定は、急務です。収入が上がることで、スタッフの待遇を改善することができ、より多くの大人に関わってもらうことができます。スタッフの「ゆとり」(人的・心理的)が、居場所の心理的安全性につながります。このシビアな課題に対しても、臆することなく、楽しみながらつながりのチカラで解決していきたいです。

今、「大人になりたくない」と思う子どもたちが多いです。おもしろく生きている大人の姿に触れることで「自分も大人になりたい」と思えるようになります。子どもたちが大きくなって「どう生きていくか？」「どんなシゴトがしたいか？」を思うとき、自己実現を叶える選択肢の候補に挙がるような、魅力ある法人にしていきます。

◎ 法人 方針

- (1) より地域に開かれ、「教育福祉」の理念を大切にした「居場所づくり」を目指します。
すべての事業で「安心できる居場所」を意識します。
- (2) 2026年度からの新たな運営のカたちをつくり出します。
 - ・こども家庭庁「児童育成支援拠点事業」を運営する事業所として、交野市からの事業委託を目指します。
 - ・各種助成金の情報にアンテナを立て、申請します。
 - ・今年度の日本財団からの運営補助は80%(最終年・自立に向けた減額)になります。
減額分の補填に留まらず更に収益を上げるための事業の展開が必要です。
 - ・マンスリーサポーターを増やします。(強化月間に取り組みます)
潜在しているサポーターの掘り起こしを重点課題とします。 →サポーター企画の開催
 - ・単発寄付、企業からの寄付などを増やします。 →HPやnoteでの紹介
 - ・いっこ塾の参加者が安定して定員に達するような工夫をします。
- (3) 交野市や市内の団体、地域との連携を進めます。
 - ・交野市内の各種イベントに参画し、市内のネットワークを拓げることで、法人の認知度を上げていきます。

◎ 事業運営部門 方針

各事業運営部門の2024年度総括・2025年度方針の詳細は後述します。
今年度、特に注力するポイントは・

① 子どもの居場所

より豊かであたたかい居場所へ＝「教育福祉」的環境づくりの実践に取り組む

丁寧な関わり合いが生まれる環境を整えて、子どもたちにとっての安心・安全の土台を築きます。その土台の上に、多様な人がお互いに刺激し合って豊かな経験が起こる仕組みを創ります。

② フリースクール

好奇心を原動力に、拡がる世界へ誘(いざな)う

一人ひとりの「今」に寄り添い、個々のチャレンジを支援する。スクール生の内発的モチベーションが高まるような投げかけを行う。

私たちのスクールが大切にしていることを伝える工夫をし、「行ってみようかな」「相談してみようかな」「関わってみようかな」と思われる存在になる。

③ 子育て支援

“わたしが生きる、かぞくが生きる、こどもが生きる” 場をつくる

母が「イキイキのびのび」と活躍できる場づくりから、その家族や子どもたちが「イキイキのびのび」と生きる社会を創ることを目指します。

母たちを応援・サポートすることに注力し、対話を重ねて、共に安心な場を創ります。また、1人ひとりの個性やチカラが生きる、サポートやコーディネートに努めます。

④ おとなの学び

大人自身の「自己肯定感」「主体性発揮」「自己理解」を豊かにする

「大人が変われば子どもは変わる」という考えのもと

「自己肯定感」「自己理解」「主体性発揮」につながる講師派遣、対話、情報発信に取り組みます。